

ネパールの体育教育の実情 (IV)

——ユネスコ'94年度識字教材開発のフィールド・テストとワークショップからみえたもの——

松岡重信
(広島大学)

はじめに

昨年6月の広島大学において開催された'93広島大学ユネスコ識字開発事業に続いて、本年1月にネパール現地での識字教材開発のフィールドテストが開催された。このフィールド・テストは、'93年に試験的に開発された「健康」「体育」領域の12枚のポスターが、実際の使用に耐えるかどうかの評価と、教師用マニュアルの改良が目的とされていた。ネパールの首都カトマンズ周辺のキルティプール(北西約20km)とポカラの街と学校を訪ね、開発教材を用いた授業を参観した。

さらに本年7月に開発教材の再構成と評価のためのワークショップが本学学校教育学部で開催された。このワークショップの対象国は、昨年と同様で、われわれ(松岡, 東原, 松尾)は、'93年に続いて本年もネパールとバングラデッシュの代表と約1週間の日程で検討会をもった。

本報告の目的は、これら一連の広島大学ユネスコ識字教材開発事業に携わっての問題意識ならびに今後への課題を明確にすることである。さらに、'91年の初訪問以来興味もあって、意識的に収集しているネパールに関する情報を現時点で整理しておくことである。これらの事実関係について、筆者自身をフィルターとして記述し、書き留めておくことそれ自体が目的である。

「国際社会」という時代的スローガンの意味するところの一つの局面としては、日本人にとって、かつて10数年前の外国とは米国やヨーロッパ諸国との交流を意味するところが大きであったが、政治的・経済的観点においてもアジア諸国が交流の射程内に入ってきたことを意味している。折しも広島市において第12回アジア大会が開催され、10月16日(日曜日)の閉会式をもって一応無事に終了した。この間競技期間中にネパールをはじめ、16名の行方不明者が出て新聞報道をにぎわかせた。また、ネパール選手団長が急死したりで、支授者も大変であったと聞いている。ネパール選手団の活躍ぶりも後にふれるが、ただこうした状況下においてもネパールやブータン、バングラデッシュは、一方

でアジアの最貧国とも表現され、その政治的・経済的意味合いにおいても日本との関係は、今日的にもさほど濃密ではないし、10年ぐらいのスパンでみれば、ODAの援助や日本からの観光客が多少増加する程度と予想される。中国新聞の「アジア・ピース・ロード」取材でも相当の情報が写真入りで流されたが、どれだけ理解が進んだかは定かではない。アジア大会は、相変わらずメダル競争として報道されたし、銅メダル2個のネパールが、どれほど印象に残る国であったかも分からない。この広島アジア競技大会において民間レベルでも多様な交流が観察された。例えば一館一国運動(南区楠那町公民館がネパールを支援した)のようなものから、個人的レベルの善意の提供も含めて、この競技会自体が、首都圏以外の地方都市での開催という触れ込みと延べ約36万人といわれるボランティアに支えられた国際交流の一大イベントであった。それでいながら一種の経済難民的な行方不明事件の誘発剤として機能した可能性は否定出来ない(11月現時点で不法滞在とか経済難民とはみなせないが)。国を代表する選手たちといえども、日本という国の広島近辺がどのようにみえたかは、極めて個人的にも興味をそられる問題でもある。物的に豊かであるかにみえるが、物価はものすごく高い……この事実は国際為替レートの問題と、ネパールの国内的には比較的安定した経済・物流の問題を次の例から考えてみれば理解しやすい。百万円あれば学校が建設できる。事務的管理要員として大人を採用しても月給2~3千円で充分(?)……という事例が示しているであろう。

I ネパールの現地フィールド・テストの実状

本年1月の現地フィールド・テストは、本来カトマンズやポカラのような比較的都市部や観光地を対象とはしていない。このフィールド・テストの交渉過程では、その事も強調してあったが、CDC(ネパール文部省の研究機関でカリキュラム開発センター)の直接管轄地域や権限機構が不明であるため、また権限機構の仕組みや人脈が不明であったため、候補地や学校は相手方にまかせる形にならざるを得なかった。このテ

ストの準備には古賀伸也氏、田中研一氏をはじめネパールの海外協力隊として滞在する数人の援助もあった。この現地フィールド・テストは次の日程ですめられた。

この現地テストに先だって、現地では次に整理するような準備が展開され、開発教材（ポスター）についても幾つかのコメントが付けられていた。

表1 現地ワークショップの実施行程

月日	午前	午後	備考
1/27	広島空港→香港→カトマンズ		直行
1/28	キルティプールの学校観察と授業	CDC訪問	Lokendra氏
1/29	カトマンズ・マラソン見学	ボカラへ移動(約200kmで8時間必要)	NGO関連
1/30	ザンブリエ高校、バルディ小学校	ベグナス JICA 養魚場訪問	和田氏
1/31	ラム小学校授業??小学校	ボカラ教育事務所訪問	
2/1	ボカラからカトマンズへ移動		
2/2	SLCテスト受験状況見学(2校)	カソリック系学校のSLC見学	田中氏
2/3	カトマンズ→香港		香港泊
2/4	香港→福岡→広島		

1) キルティプールとボカラでの事前準備:

今回のユネスコ識字教材開発に初回から関与している CDC の Gajendla 氏と古賀氏を中心にフィールドテストの準備会が開催されている。筆者の訪問時期には、通常カトマンズ近辺は学校が休暇であるため、熱心な校長のコントロールがきいている個所としてキルティプールが選ばれていた。これらは基本的には個人的人間関係や無理のいえる日常のつき合いの上に成立している契約である。これらの費用として US \$1,000 が準備資金として事前に支払われていたが、会計用途は詳細には分かっていない。十分であったか不十分であったかも不明である。

まず、Gajendla 氏が日本から持ち帰った12枚のコーティングされたカラー・ポスター（A3サイズ以上）をモノクロ（B4サイズ）にして各100枚縮小コピーし、さらにこの英語版の教師用ガイドをもとにネパール語版を作成し、キルティプールの学校で構成された委員会を通して17名（内女性教師3名）の教師に配布、かつポスターの表現意味や使用方法についての討議、それにいわゆる模擬授業のような形で実施され、これに12/20～12/22の3日間を費やしていた。

ボカラでは、キルティプールと同様の手続きで、1/18、1/19の2日間10名の男性教師たちに講習会が開催された。この間の正月などという習慣はネパールにはない。

特にポスターの内容についての評価は、カラーからモノクロに転化され、現物が見せられていないこともあって、ポスターで示そうとした「ゴミはきちんと捨てましょう!」「ルールを守って遊ぼう!」という主旨

は理解できるし、それが日常の子ども達の学校生活の問題点であることは教師も理解したという。しかし、基本的には筆者や Gadendla 氏で考案し開発した英語版のマニュアルはまるで役にたっていない……つまり、「…を考えさせよう!」とか「…を自分で理解する!」とかの発想はネパールではまるで通じないとのコメントが出された。それぞれのポスター1枚1枚についても細部にわたるクレームがついた事実についても報告を受けた。例えば先の第Ⅲ報で例示した「禁煙」のポスターは、「何故タバコを吸う女性が何故こんなに肥っているのか?」…これについては開発者サイドは「妊婦を想定して…例えばどんな害が考えられるか…」とのことを強調したかったのであるが、単なる表現手法の上手下手ではなくて……まるで通じていない事実を準備段階の情報として突きつけられた。

2) 授業のフィールド・テスト

ーポスターを用いた体育授業ー:

キルティプールの学校は、二部制で午前に通学する子ども達と、午後に通ってくる生徒から構成されているが、われわれは午前の部を観察した。平屋の向かい合った校舎の間の30m×45mの方形グラウンドにおいて、ポスターの1枚にあった「ドッジボール」の授業が展開された。教員は30歳代の男性で生徒は約40名が2班にわかれて授業はすすめられた。円と四角のドッジボールラインが引かれて3年生ぐらいの子どもが男女混合でやっている様子は、少しマゴマゴしている点を除けば日本でも観察される風景であった。ボールを投げる様子も両手投げが多く、また当てられた者が外野に出たり、当てた者が内野に入るといったローテーションはこの段階でルールとしては未確立というか、指導されていなかったものと思われた。約8分教室の中でルールらしきものが説明されて、その後のグラウンドでの活動であった。偶然か円も四角もその大きさが丁度、子どもたちのボールの投距離とマッチしていた。子ども達の様子は結構楽しそうに観察された。そして、この段階では成功という錯覚さえもってしまった。

3) キルティプール街との学校の様子:

校舎の隅には赤いポリバケツがおかれ、そこに水が蓄えられて手洗い水に使われている。ドッジボールを終えた子ども達の半数がこの水を少しづつ使って手を洗った。校舎から約15m離れた斜面地のところに数個のトイレが作られていたが、われわれの観察中これを使用するものはいなかった。朝の朝礼はかなり厳しく校舎に向かってグラウンドにビッシリ並んだ後に、一斉に教室に向かう様子は筆者らの小学生時代を思わせるも

のがあった。ここの学校は、グラウンドは決して広くないが、砂場と思わせるもの、移動式のシーソ（鉄製）と何故か砲丸投げのサークルが埋め込まれていた。多分この学校が小中高を兼ねた学校であるためと考えられる。そして、ボール類は古いが空気のシッカリ入ったサッカーボール1個と、ゴムボール数個が教員室で確認された。砲丸は直接みていない。

この地の標高は、約1,500m程度であろうが、この時期乾期であることと、緯度が低いことから、午前10時の外気温は摂氏20度に近いと感じた。教室は建て増し中のもも含めて鉄格子がはまっているが、窓ガラスはもとから入っていない。教員室も同様であるがここには窓は作られておらず、昼間でも相当に暗い。この部屋で打ち合わせや会議もされるのであろうが、机は1つ、木製の物入れが1個で地面は踏み固められた土であって、学校校舎そのものもレンガやブロックを積み上げてトタン屋根をつけているだけであった。

学校近辺の村落を1時間ばかり歩いてみた。村落全体が緩い山の斜面にへばりついていて、歴史を感じさせるヒンドウ教の神社や牛が寝そべり、豚が親子で歩き回り餌をあさっている。村落の幼い子ども達もそのなかで遊んでいる。一部の風景であるが、男達はたむろしてバクチに興じ、女達は産物の一つである絨毯を織っていたり、洗濯していたり……時間のゆったりしたリズムを感じる。

家屋の側というか道の両側に半ば崩れたような溝があって、すべての排水やらがここを流れている。雨期や温度の高いときのことを考えてしまうが……これはこれでバランスのとれていることなのかも知れない。下流の生活者はどうなるのだ…と考える事自体…ナンセンスなのかも知れない。悠々たる時間の流れと、動物も人間も一体化した生活の在りように、憧れのようなものさえ感じていた。多分乾期で臭いも気にならなかったからであらう…と思う。

4) ポカラでの幾つかの学校とフィールド・テスト：

ポカラでの最初の訪問校はザノブルエ高校で10年生（15才程度までであるが20才ぐらいにみえる者もいた）までが在籍している。ここも朝の集会は相当広いグラウンドにみちあふれんばかりの子ども達が集合して……授業が開始された。ここでは、中学生（日本の学校制度的には小学校6年生程度）と思われる学年にドッジボール授業が試みられた。教師は30代後半の男性で、子ども達を男女別に集合させておいて、石灰を手の平にすくって円を描き始めた。直径15-18mにおよぶ円を中腰のまま描いて、キチンと見事な円になっていたのには少々驚く。実に見事なものである。が、その後

は約半数の生徒を性別に円の外と内に配置してドッジボールがはじまり、円が大きいこともあってボールにかかっているのは極一部の子ども達で、なおかつ男子生徒がやっている間は女子はじっと待たされて、約15分で交代するも、あとの状況は似たようなものであった。

後に担当教師との数分の交歓で、人数とサークルの大きさや投げる能力との関係をつかんでおく必要があることを通訳を介して述べたが…理解してもらえたかどうかは不明である。基本的には対象年齢からみてもフィール・ドテストの主旨とは合致していなかった。

この学校はグラウンドもよく整備され、片隅には先任のポカラを拠点として活動していた海外協力隊員の金田英子女史（現長崎大学教養部勤務）が作ったというバスケットボールのボードが設置されていた。校舎建築も2階建てで、階段下などに石灰や道具類は置かれていたが、ボールや遊具の整備状況は確認できなかった。菩提樹の樹とそれを取りまくように造られている円形や楕円のレンガやコンクリ石積みの保護冊のような土盛がバランスよく配置された美しい学校であった。やはり窓ガラスはない。ポカラでも数本にはいるいい(?)学校ということであった。

午後訪問したパルディー小学校は純粋に小規模な5年生までの小学校で、ここでは教師歴19年という女性教師が「Working together」と名付けていたポスターを用いて、数分室内授業をして、続いて屋外（約20×30m）の清掃を共同でやってくれた。落ち葉集めや草取りといった作業をして、校庭の隅のごみ捨て場に積み上げていった。先生が自ら率先してゴミ拾いをやり……子ども達も素直に受け入れている感じがもてた。他の教材ポスターについても意見交換はあったが、この教師はこのポスターの意味をほぼ理解していた…と思われた。さらにネパール伝統の子ども達の遊びであるDhywaiと呼ばれる石蹴りの点取りゲームも待ち時間に観察できた。地面には手か棒で彫り込んだと思われるラインがみられ、これが常日頃の遊びであることが理解できた。

このパルディー小学校も校舎の裏は刺つきの樹がはえていたり、ほとんど未整備な状態で、水場はゴミ捨て場の反対の校庭隅にコンクリ製の水貯めが準備され、蛇口が2個つけられていた。水道がどのように引かれているかは確認できなかったが、子ども達が水くみをしているようにもみえなかった。そして使われた水は塀の外の溝へ流されている。子ども達が、掃除のあと並んで手洗いしているのも、われわれには好ましい状況に観察されたが……ポカラの地域的風土や習慣からみて、これが教育効果なのかどうかまでは言及できな

い。

次の日に訪問したラム小学校も石積みで囲われた、広いグラウンドで野芝や草が生えており小石も露出している。これらの石は時折取り除かれるようでグラウンドの隅にある水場（地面から水道管が露出していて低地に水は流れ放題であった）の近くに石場があった。30才前後の女性教師が「Working together」のポスターを使って青空授業を展開してくれた。

ポスターをみせて、ひとり一人がバラバラに作業するより協力した方が能率がよい……というような展開で、石をひとり一人に運ばせる実演と数人のリレー方式を比較した実演をみせた。そして、今度は石場に向かって長い行列をつくり、石を運ばせた。これはポスターに描かれている図案でもある。最後に子ども達を集合させて、どちらが仕事は早く終わるか……ということで挙手させて、まとめられたが、5-6才と思われる子ども達の反応は「面白い」とか「なるほど」という様には観察されなかった。追加的にいえば、この教師は遅刻してきたし、学校の外から覗いている子ども達（小学校生徒とほぼ同年齢で何らかの事情でドロップアウトしたものと思われる）を、他の教師が追い払っている姿も、ある意味では興味ある風景であった。

その次に訪問した学校は、側に私立の学校があって、迷路のような通路から、100×70mぐらの大きい広場をもつ学校であったが生徒の在籍数は未確認ながら5学年あわせて200名程度であった。教師達が広場で座り込んでポスターを確認しながら選択していた。そして教室のなかで、40才ぐらの男性教師が、教室の中で伝統遊びの Dhywai の図を地面に描いて何か説明したが……10分程度で終わってしまった。当たり前すぎて……扱えなかったのかも知れない。

面白い風景に出くわしたのは、われわれの訪問時に5年生程度と思われる子ども達が、教師と一緒に鉄製のバレーボールの支柱を地面に埋め込む作業をしていた。土だけで埋めてすぐにたおれそうな不安定さがあったので、石を運んで支柱をささえて埋め込むように共同作業をやると、それにすぐにヒモをかけて空気の抜けた柔らかいボールで遊び始めた。バレーボールの形式など……どうでもよい……というおوراかさが好ましく思えた。

5) フィールド・テストの総括：

部分的には成功か思わせる実践もないわけではないが、実際に使用されたポスターが12枚のうち、「ドッジボール」と「Working together」「Dhywai」の3枚と「禁煙」も一部で使用されたが、ほとんどこれらに偏ってしまっていた。ポスターは、カラー版を当日持

ち込んで、どれかを選んだ授業をやって欲しいというパターンで展開され、かつこの実践者達が事前の準備会に出席していたかどうか確認がとれていない。

ただ、フィールド・テストの準備会の段階で「絵」のひとつ一つに細かいクレームがついたり、授業のために教師用ガイドやマニュアルをつくるのであれば、単に「目的」「発問」「事例」を項目事に示すのでは通じない点を指摘された。つまり、われわれが開発したポスターとマニュアルは、40分なら40分をどのように流すかについてあらかじめのストーリーを作成した上で、「質問」や「板書」「指示」などの内容をすべて作成しなければ使いものにも何ものもない……という現地の反応が大方であった点である。第Ⅱ報Ⅲ報でも既に少しふれたが、保健や体育が一般的でないことに加えて、あらゆる教科の授業が「棒暗記」手法であると協力隊員（JOCV）が酷評するように、教師にも子どもにもお互いに「…について考えよう」とか「…を議論しよう」とかは授業の方法として確立していない。また、そのような事を大切にするという環境も教育方法ももたない……という事実である。

支援者の古賀氏によれば、こうした教授法を改革していく動きは、これまでにも、例えば「BASIC PRIMARY EDUCATION PROJECT」などで、絵やイラストをたくさん使った教科書や教師用指導書が作成されているが、資金問題や搬送手段に制限があるという。

さらに今回のコーティングされたカラー・ポスターは12枚1組だけであるが、最終的に MASS PRINTING の問題と、道もない山岳部にどうして届けられるかといった深刻な問題を抱える。モデル地区で展開するかどうか……これも明確にされる必要がある。こうした問題点を要約すると

- 1) それぞれの題材が低学年に適切かどうかの再検討
- 2) 絵自体の改良
- 3) わかりやすい目標の提示
- 4) かゆいところに手の届くような、授業プランと Teaching Manual の作成
- 5) 印刷への見通しと、配布地域の確定
- 6) Mass Printing と普及の方法確認

などが課題といえる。ただこうした筆者らの中途半端な協力の立場は、上記5)、6)への見通しを全くもたないものである。教育用のポスターや識字教材の開発と言えば聞こえはよいが、多分無責任な一過的な介入に過ぎない可能性の方がはるかに高い。広島大学の学校教育学部事務局を置くユネスコ識字教材開発委員会も、日本の文部省とユネスコ・アジア本部（バン

コック)との板挟みになっている様子も伺える。かつて、こんな協力よりユネスコから直接金を払ってやってくればよいというアジア本部の幹部の発言もあった。しかし、それでは援助金が使途不明金になる可能性も大きく、日本の文部省もそれを嫌っている。従って、アジア本部の幹部のこの発言は極論にしても、もう少し実のある方法が模索されるべきであるし、1)～4)の課題に対しても現実には生きた情報が少なすぎるというのが現実である。

同時に附記しておけば、同じ広島大学ユネスコ識字教材開発グループでも3グループの内の1グループは、現地政府がこれらの成果を援助する形を整えている報告もあった。つまり、印刷・搬送を含めて一定の見通しをもった展開に発展している…という現実性に驚嘆した。

II 第2回ワークショップの展開と問題点

本年1月のフィールドテストを受けた形で、昨年(1993)の第1回ワークショップと同じ国の代表を再度招弊し、6月から次表の日程で第2回ワークショップが広島大学学校教育学部で開催された。

実質解決不可能と思われる課題を抱えたまま、第2回ワークショップが開催された。われわれのスタートからのつまづきは、先ず何故か理解できなかったが、ネパール代表が2日も早く広島入りするし、従ってホテルも予約されていなかった点である。しかも少しあとで分かったことは、彼はIOCのトレーニングセミナーに出席するため、予定を早めて渡米するという予定変更が判明。さらに何となく予想はされていたが、バングラデシュ代表は、前回と異なる人物が来日してきた。同じ人物の派遣を要請していた中で、違反はこの識字教材開発事業参加7カ国中のバングラデシュだけであった。バングラデシュ代表は、現地フィールド・テストの結果をおよそ次のように報告した。

表2 第2回広島ワークショップの日程(正式開始7/4)

月日	午前	午後	備考
7/2 (土)		18:55Mr. Gajendia 氏来日 (ネパール代表)	広島空港 松岡宅泊
7/3 (日)	1. 事前レポート原稿作成 2. 日程調整(附属、県立体育館) 3. ネパール版の検討	夕方: 広島のホテルへ	厚生年金 会館
7/4 (月)		13:00オリエンテーション 13:30全体会議(レポート) 18:00レセプション	
7/5 (火)	チーム別教材開発	チーム別教材開発	
7/6 (水)	チーム別教材開発	全体中間報告 ネパール代表明朝来日へ	美術科学 生図案化
7/7 (木)	ネパール代表7:00のリムジン バス チーム別教材開発	附属小学校授業参観 (夕方市内観光案内)	カラーコ ピー
7/8 (金)	全体会議・マニュアル等印刷	各国ワークショップ計画実施プ ランの検討	午後より 松岡宅取 へ出張

- ①文部省の専門家3名と小学校教師5名で検討会と実際に授業をやった。
- ②英語版の教師マニュアルの表現が適切でない。
- ③そこで数枚の図案を持参した。その代表は河川と環境問題を扱っていた。

残念ながら、このフィールド・テストには誰も立ち会っていないし、テスト・レポートに、具体性がなくどのように改変することが必要かは把握できなかったのが実情である。ネパールのフィールド・テストには、筆者自身が立ち会っており、ほぼ先に記載しているので割愛する。ただ彼も幾つかの図案を持参していた。前回のワークショップでは、ポスターの枚数が多すぎた(制限10枚)との批判もあったので、先ずはそれのクリアーが第1の課題とした。そこで、類似性の高い「サッカー」と「5メン・サッカー」のうちフォーマルなサッカーは小学校低学年ではおこなわれない…という反省もありこれをカットした。大まかな変更は、以下の通りである。

表3 第1回から第2回へのポスターの改訂

改訂前(1993年版)		改訂後(1994年版)	
No1	Dhywai Khasha with friends	1	Physical Education
2	Working together	×	No1 ChawaiKaasaa (EkkaDoaa)
3	Evaluation in group	×	No2 Kabaddi
4	Cleaning together	8	No3 Soccer (Football)
5	Packing materials together	7	No4 Dodgeball
6	Cleaning together	△	No5 Rope jumping
7	Population educatuin, Family plan	×	
8	No smoking	×	Health Education
9	Dodgeball	4	No6 Washing hand
10	5 Men soccer	3	No7 Packing materials
11	Normal soccer	×	No8 Cleaning together
12	Kabaddi	2	No9 Water Polution

註) 中央欄の×: カット, 番号; 再編の番号, △: 新編

表3の左から右への改訂を行った。まず、体育部門と保健衛生部門にわけ、中央は3者での総括評価で、×は削除を意味する。そして番号は右の体育と保健編の番号へ対応している。△は統合したもので戸外と屋内の[Cleaning together]を1枚のものに変更した。結果として、合計9枚として再編成し、図案も各代表が持参したものを生かしながら、新たに帽子や屋根や素足の子どもの何人描くかでもめたり、……の細かい部分の共通化を計った。さらに、「掛け図」教材として例えばサッカーで、意識的にファウルの場面を描き、どうやってトラブルを解決するか……といった小細工も加えてみた。

これに英語版の教師用マニュアルをつけたが、残念ながらネパール代表が早く離日したことや、開発討議中のものの決め方にルールをもたない点もあって、30-40分の授業の流し方まで含めた詳細マニュアルの作成には至らなかったし、昨年の失敗をそのまま繰り返した感があった。非常に中途半端な開発研究に終わった印象が強い。

Ⅲ 総括

この識字教材開発研究は3年間のプロジェクトとして立案され、ユネスコ・アジア本部と文部省に申請されている。時期的なズレもあって、今回がその2年目を終了したことになる。そしてもう一度フィール・ドテストの可能性が議論された。われわれのチーム以外では状態もやや異なるし、結論は先おくりされた形になっている。最終日筆者自身が別の出張で、閉幕まで立ち会っていないが、事務局でも混乱があったり、予算の立替払いの問題も間接的に聞いている。こうしたプロジェクトにはつきものの事らしいが、難しい問題といえる。

目下 NGO での活動も検討中である。東広島ユネスコ協会では、ポカラから東北約30kmにあるベグナスという村落の学校にコミュニティセンターを建設しつつある。ここでは、図書室や保健室を備えた地域の文化センターを建設し、かつむこう10年間の職員の給料を準備して、継続的に「自助努力」を促しながらの「経済支援」を続けるという試みがなされている。その竣工式典出席と学校の見学を目的としたネパール訪問が'95年1月下旬から約10日間の予定で組まれている。筆者自身の役割は、識字用、物語や絵本といったネパール語の書物を購入してこのセンターの図書室に搬入する仕事が課せられている。CDCとコンタクトをとりながら準備を進めているが……おもうように事が運ばないのもこうした NGO 活動の特徴かも知れない。ただ、この NGO プロジェクトは、かなりの実務的専門家が直接間接かかわっており、建築士や支援金集めのメンバーや、医師・家庭婦人が組織的に動いている。こうしたかわりのもち方を通してみえてくるものを、まず「ネパール」をより理解する……という一点に集約させて「参画型観察¹⁾」として展開したいと希望している。

斎藤によれば、日本の国際協力といういいかたも幾つもの問題もちながら、70年代(富の格差や不正をさけて医療教育という援助理論)80年代(①貯蓄投資ギャップを埋める②貧困層へ直接援助③構造調整政策対話の援助)90年代の人づくり策…と性格を変えつつ、特にアジア諸国に対する絶対金額では世界随一にあるという^{2) 3)}。東広島に JICA 訓練所の開設(1994年度予算)も控えており、広島大学の独立研究科「国際協力研究科」や関連する機関の役割は益々増大すると思われるが、……否、広島大学はこれを利用している傾向もある。それでいて、ネパールのような国は逆に、みえにくくなりつつあると感じる。まして、米国の没落を想定しての「大東亜共栄圏」ならぬ「アジアの共

円圏⁴⁾」が主として中国をターゲットとした経済戦争の横相を呈する時、われわれの仕事は何を意味する事になるのか……不安にならないでもない。

さらに、本年11月のネパールにおける総選挙で、王国に共産党政権が誕生したと報道された。どう動くか見定めねばならない。

文献

- 1) Stephen Devereux and John Hoddinott: FIELDWORK IN DEVELOPING COUNTRIES, pp. 3-24, Simon & Schuster International Group, 1992
- 2) 草野 厚, 他: 日本の ODA をどうするか, 日本放送協会, pp. 150-175, 1991
- 3) 斎藤公男: 国際協力研究科創設記念事業について, pp. 24-26, 広大フォーラム, NO. 315, 1994
- 4) 邸永漢、渡部昇一: アジア共円圏の時代-さらばアメリカ-, pp. 181-186, PHP 研究所, 1994
- 5) Gajendra Lal Pradhan: ATHLETICS (10 All Time Best Rnkings in Athletics Upto 31 March 1994)